

農業共済新聞

2020年
(令和2年)
6月17日
第3320号

今週の
おすすめ記事

2面・総合

女性農業者を特集
2019年度農業白書

3面・農業保険

地域農業発展に協力
関係団体と協定結ぶ

5面・すまいる

ムラを守る絆
サバア送り(山口県)



農業共済新聞ホームページ(右がQRコード)を活用ください



公益社団法人
全国農業共済協会

〒102-8411
東京都千代田区一番町19番地
購読 ☎03-3263-6413
編集 ☎03-3263-6727
月4回・水曜日発行
*全国農業共済協会2020
http://www.nosai.or.jp/

6月は
災害に強い
施設園芸づくり月間



支え合いで前進

婦キャベ海外協力隊プロジェクト

NPO法人自然塾寺子屋



熊川栄婦恋村長(前列中央)を表敬訪問した矢島さんと隊員

新型コロナウイルス感染症のまん延は、外国人技能実習生らが来日できない事態を招き、多くの農業経営体や産地が人手不足に陥っている。群馬県甘楽町に本拠を置くNPO法人自然塾寺子屋(矢島亮一理事長、55歳)は、夏秋キャベツの出荷量が50年連続日本一と同県婦恋村のキャベツ生産の一助になろうと「婦キャベ海外協力隊プロジェクト」を企画。政府の出入国制限措置を受けて、任期中で緊急帰国したJICA(国際協力機構)海外協力隊員ら5人を1次隊として五つの経営体につないだ。7月中旬までに、合計20人程度の隊員の橋渡しを見込んでいる。

「当プロジェクトは産地を守る」と同時に、想定外の帰国で不完全燃焼している隊員たちの情熱を昇華させることが目標」と矢島さん。「初の試みで手探りの毎日」としながら、1次隊5人が宿泊する村内の施設に泊まり、期間満了となる10月下旬までフォローに努めるという。宿泊費用は、群馬県の補助金のほか、インターネットで支援金を募るクラウドファンディングの活用も視野に入れる。

プロジェクトは4月中旬に動き出し、1次隊員は新たな活動



定植して約1カ月のキャベツ畑を前に矢島さんと餅原さん

「当プロジェクトは産地を守る」と同時に、想定外の帰国で不完全燃焼している隊員たちの情熱を昇華させることが目標」と矢島さん。「初の試みで手探りの毎日」としながら、1次隊5人が宿泊する村内の施設に泊まり、期間満了となる10月下旬までフォローに努めるという。宿泊費用は、群馬県の補助金のほか、インターネットで支援金を募るクラウドファンディングの活用も視野に入れる。

海外協力隊員とキャベツ産地を橋渡し

柔道の指導者としてフィジー共和国に赴任したものの、政府の出入国制限実施を受けて、20カ月以上の任期を残し帰国した。キャベツ11畝を作付ける佐藤俊さん(38)は、自然塾寺子屋を通じて女性の協力隊員を1人雇用了。「彼らは民間でいち早く動き、婦恋のキャベツ作りを支えたいという熱意が感じられる。生産者として非常にうれしい」と話す。3人を予定していた外国人技能実習生は、今なお来日のめどが立っていない。就労前研修では、矢島さんはモチベーションの保ち方など心理面を重点的に指導。畑仕事の技術的な指導は受け入れ先に一任し、事故に備えて労災保険への加入を依頼した。雇用契約は各隊員が個別に結ぶが、金曜日を5人共通の休日とすること、同期の絆を深める時間をとっている。「任期中での帰国に続き、未体験の農作業。彼

「全国に名をはせる産地であり、人材不足に悩んでいる」と矢島さん。「このプロジェクトが、産地を支える同様の取り組みをする個人・団体の参考になれば幸いだ」と話す。

「この『空気』は、日本人のコミュニケーションに欠かせない。お互いの信頼感・安心感の源である。リモートワークで画面のある。ソーシャルメディアをとり入れながら、会って『空気』を共有する。その記憶をよりどころにリモートでつながらせる。『会った』と『リモート』のメリットをうまく使って、『空気』を共有し、信頼関係の中で安心して暮らす『新しい生活様式』を模索していきたい。(愛媛大学大学院農学研究科教授)

1994年から2010年まで、農業共済新聞では「農を拓いた先人たち」という連載を掲載した。明治から昭和にかけて日本農業の発展を支えた作物品種や農業機械、防除技術などを取り上げ、開発や普及に携わった農家や研究者の熱意や苦闘を紹介する。著者は、元農林水産産技術会事務局長の西尾敏彦氏で、長年、農業技術に関する歴史の発掘と記録に取り組んでいる。連載の記事はすべて農林水産・食品産業技術振興協会(JATFA)のサイトに掲載し、検索で見つかるためか、今も時々問い合わせがある。担当として何度か取材に同行し、有名品種の育成者からじかに経緯を聞くなど貴重な経験をした。同時に、農家の功績は試験場など比べて記録が少なく、時間の経過とともに失われる心配があることも知った。その西尾氏が、共著で『日本水稲在来品種小事典』(農文協)を出版した。「旭」「亀の尾」など「コシヒカリ」につながる品種だけでなく、地方の稲作を支えた295品種を網羅する。多くは農家の観察から生まれた。育成経過や名称の由来など読み物としても楽しめた。

「空気を共有する新しい生活様式」

防風林